

沖縄・奄美における豚妖怪の伝承と境界性

栗原 健

「ナンプル坂にはね、昔からマジムン（魔物）がたくさん出よったそうだ。それで、こっちでたくさんの方が魂を取られているらしい。私が十八歳に紡績に行った時、私の母が私を送った帰り、遅くなってからこのナンプル坂を通った。そしたら、豚グワーマジムンがたくさん出たって。『これはあぶない』といって、しゃがんでるわけよ。豚グワーマジムンを股の下を通したら魂を取られるからね。」（鳥袋カナ）¹

「アヒャートゥー（親豚）は9年以上飼うと化けるから長く飼ってはいけないといわれている。小豚に化けていろいろな人の股をくぐって、その人の魂を取るからである。」（神谷厚雄）²

はじめに

沖縄地域で最もよく知られているマジムン（妖怪）と言え、キジムナーであろう。しかしながら、知名度では劣るとはいえ、伝承の世界において見逃せないのが「ワーマジムン」（豚妖怪）の存在である。「ワーマブヤー」（源河）、「ワークワーマジムン」（宜名古）、「ヂーワーワー」（喜如嘉・根路銘）、「ユナウウ（夜の豚）」（徳之島）、「ミンキラグワ（耳切り豚）」（奄美大島）、「クビキラウウ（首切り豚）」（同）、「ウワックワ」（同）など、その名称も形態も多様であるが、豚の姿をしたマジムンに関する話が沖縄から奄美諸島にかけて数多く伝えられている³。

こうした豚をめぐる怪異譚については、すでに田畑千秋が丁寧に伝承を整理し、その形態と民俗学的背景について優れた考察を行っている⁴。しかしながら、なぜ沖縄では豚がそのように妖怪化されたのだろうか。また、豚が股をくぐりたがること、その行為が死を招くことは何を意味するのか。こうした疑問点については、なお踏み込んだ分析を要する。

本論では、東アフリカ・コモロ諸島の妖怪牛の伝承を取り上げた花淵馨也の研究を参考にしながら、コモロの牛のように沖縄の豚が人間界とその外側の世界の間を往還する「境界の動物」であったことを示し、なぜ夜道に登場する妖しい存在が豚とされたのかを考えてみたい。

1 豚妖怪譚の種類とその起源

豚妖怪に関する話は多岐にわたるが、最もよく知られている話型としては2種類のもの

が挙げられる。

- (1) 長年人間のもとで飼われていた豚が男性・女性に姿を変え、異性の人間と遊ぶ。あるいは性関係を結ぶ。
- (2) 子豚の妖怪が夜道に現れ、人の股の下をくぐろうとする。くぐられた人は死か災難に見舞われる。

(1) については、沖縄各地の民話集を開けば、「美女に化けた豚」あるいは「豚婿入り」などのタイトルで容易に見出すことが出来る。田畑がまとめているように、おおむねこれらの話の内容は、「男(女)のもとに見知らぬ女(男)が出入りするが、草履を奪ったところこれが豚の爪になる。調べてみると、自宅または近所の豚が爪を失っていた」というものであり、「豚は長く飼ってはいけない」という結論が付されることが多い。毛遊び(野原等で男女が唄や踊りを楽しむ場)に紛れ込んで来た人物の歌声が甚だ悪かった、或いは体臭が甚だしかったために怪しまれるという展開が含まれることもある⁵。

なぜ、豚が人間に化けて親密な関係を求めるのか。田畑は、4世紀東晋の『搜神記』八巻本に酷似した筋立ての物語があることを指摘し、この説話が古代中国から沖縄に伝播したと見る。しかしながら、話が広く沖縄地域で受け入れられた背後には、この地の人々と豚の密接な関係、「共同生活者としてのきずな」が背後にあると考えられる⁶。沖縄では戦後に至るまで、便所と豚小屋を同じ場所に設置する「豚便所(フール)」が広く見られた⁷。豚を飼育する家庭では、豚は便所の穴を見上げながら家人の人糞を食べていたのである。このため、家人の秘所を日ごろから見ていた豚が彼らを恋い慕い、人間と化して関係を求めに来たと田畑は考察する⁸。「長年飼ってはいけない」という結論も、人間に対して肉親同様の情愛を豚が持ち始めることを恐れたためであろう。豚と人間の間にあるこの物理的・心理的な近さが、後の分析においても重要になる。

(2) の子豚の妖怪については、文献をたどると、昭和4(1929)年には島袋源七が『山原の土俗』において、「道の辻を通る時は小股に又は足を交差してあるかねばならぬ。辻には『ジーハーハー』又は『ジージーワグー』が居る。之に股下をくぐられたら死す」と報告している⁹。島袋はこれを「犬や豚、鳥等の化物で、真白歩くもの」としているが、昭和6(1931)年に刊行された金城朝永の「琉球妖怪変化種目」では、「ウワグワー・マジムン」として「豚の形をして現れて、しきりに人の股間を潜ろうとする。潜られると矢張りマブイ[魂]を取られて死ぬ」と記しており、やはり豚のイメージが大きい¹⁰。命を取られるまでに至らなくても、白い豚に付きまといわれた後に長期にわたって重病に苦しんだという話、豚に道を迷わせられて一晩中歩かせられるという話も伝えられている¹¹。

子供たちは、これらの豚に注意するよう戒められていた。「ハンカジョウは、また夜になると子豚のお化けの出るところとも言われていて、しばしば私も注意を受けたところである。夕闇の何処からか、グーグー子豚の声がするようで、それを聞くと同時に足をそろえて、股も開けないようによくしめておかないと、万一両足の股から子豚にぬけられると

大変だと言うのであった。」(津波徳助)¹² 新里幸昭も、母から「ウフミチメーには、チーワーワーが夜歩いていたので気をつけなさいよ」と注意されたと述べている¹³。具体的に豚妖怪などが出るとして警戒されていた場所がいくつも存在したのであり、それらの地はしばしば「マジムドゥクル」(妖怪が出没する場所)と呼ばれていた¹⁴。

奄美大島の各地でも同様の豚の伝承が語られている¹⁵。特に同島の秋名・幾里では、集落の周縁部、ノロゆかりの地や神道とされている地域にこれらの妖怪が出現すると伝えられていた¹⁶。徳之島ではこのあやかしは「ユナウウ」と呼ばれており、地面を転がるなどして人を惑わすとされている。やはり股をくぐられることが災難を招くとされ、これを避けるためには土手や石に腰かけて豚が通り過ぎるのを待つ、両脚を汲んで飛び跳ねながら逃げるなどの対処をしなくてはならなかった。機敏にこれらの動作を取れなかった村人が「股越え(マタグイリ)」をされ、熱に伏した後に2日後に死んだとの話も伝えられている¹⁷。

与輪島でも同様の「ワームヌ」の伝承がよく知られている。ここでは、豚妖怪に遭遇した人は両脚をピッタリ合わせ、手持ちの棒などを使って体との間に門状の空間を作ればよいとされている。ワームヌが股ではなくその空間をくぐるからである。手持ちの物が何も無い状態で豚に出会ったある女性は、とっさに草履の紐を下げて空間を作り、難を逃れたという¹⁸。

中国起源が明らかな「美女に化ける豚」譚と異なり、夜道の豚伝承の源は不明である。奄美大島にはこれを白鼠の一種と考える見方もあるようであるが、そのような合理的説明では、広範囲にわたる人々の恐れを説明することは不可能であろう¹⁹。田畑は、早世した赤子や小児が軒下に埋められ、人の股下をくぐりたがる妖怪と化すとの伝承が徳之島や奄美大島にあることを指摘し、赤子の霊が地表を走り回るとの話が豚と合体した可能性を示唆している²⁰。同様の「アカングワー・マジムン」の言い伝えは沖縄にもあるため、地域的な重なりは存在する²¹。しかしながら、仮に赤子の霊に豚妖怪の起源を求めるとしても、なぜ合体するのが豚でなくてはいけないのか。豚が股をくぐるイメージが、なぜ恐怖を呼び起こすのか。その点については更なる考察が必要となろう。

2 比較文化的視点から：コモロの「妖怪牛」

ここで考えるべきことは、沖縄における人間と豚との関わり方の性格である。豚妖怪のイメージの背後に存在する両者の関係を分析するために、海外の動物妖怪のフォークロアを参考にして新たな視点を得たい。ここで役に立つのが、花淵馨也によるコモロの妖怪牛に関する研究である。

コモロ連合は東アフリカのモザンビーク海峡に位置する島国連邦であり、花淵の研究の舞台であるムワリ島はその島の1つであるが、この地域では古来よりゼブ牛が広く飼育されている。労働に使役されることはなく専ら食用であるが、大量の牛肉が消費されるのはおおむね特別な行事の時に集中する。特にシュングと呼ばれる祝宴の際には、何頭の牛を

屠殺して来客をもてなしたかが名誉にかかわる問題となる。また、祝祭の際には、ンゴマヤニオンベといわれる闘牛も催され、男性たちは突進して来る猛牛から身をかかわすことで観客を盛り上げる²²。このように牛はムワリ島の年中行事には欠かせない存在であるが、基本的に彼らは食物であり、牛と人間との関係は親密なもの、愛着あるものとは言えない。両者の間には「人格的なつながり」は見られないと花淵は観察する²³。

この身近なはずの家畜が、日暮れ時には魔物の姿で集落の外に現れることがあるという。これが「セラヤニオンベ」と呼ばれる巨大な妖怪牛であり、山と村の中間地域、しばしば村の近くにも出現する。その黒々とした姿を見た者は病に倒れ、急死してしまうこともある。妖怪牛は現在も広く恐れられており、牛が出現したという噂だけで人は外を出歩かなくなるほどである。また、コモロの呪術師は魔術によってセラヤニオンベを人に取り憑かせることが出来ると信じられており、この霊を被害者の身体から追い払って山に返すための儀式も存在する²⁴。

こうした妖怪牛に対する恐怖の念の背後には、何があるのだろうか。花淵は、牛は牛飼いによって山裾の牧草地に連れて行かれ、しばしばその地に置いた杭につながれたまま放置されることを指摘する。人間の村だけでなく、妖怪や精霊が棲むとされる山野との間を牛は往還するのである。実際、牛に精霊が近づくという伝承もコモロには多い。このため花淵は、「牛は家畜であるが、村と山の間を移動し、人間界とその外部との間の境界を越境する動物」であり、「境界的な存在であるといえる」と考える²⁵。このように、温和な家畜でありながら時として制御不能になる野生性、異界とのつながりを兼ね備えた牛に対する恐れが、ンゴマヤニオンベに対する熱狂やセラヤニオンベへの恐怖の背景にあると花淵は考えるのである。牛たちは、「一方では、すっかり馴化され、所有され消費される単なる『肉』として扱われながら、他方では、馴化し難い『野生』の牛として人間を攻撃する存在」でもあり、その関係は「二元論的な分類によっては捉えることのできない」ものでもある。妖怪牛はこうした関係の「駆け引き」の中で出現するのである²⁶。

3 沖縄における人間と豚の関係

当然であるが、東アフリカのケースをそのまま沖縄にあてはめることは出来ない。実際、一見するとコモロの牛と沖縄の豚の間には類似性に乏しいように見える。前述のフールに見られるように、沖縄の豚は人間の居住空間近くに生きる家畜であり、集落外の自然界との間を行き来する越境的存在には見えない。また、コモロの牛よりも豚が親密な心理的関係を人間との間で保って来たことは、「豚に化けた美女」等の説話を見れば分かる。闘牛のような習慣が無い以上、人が豚の野生性に直接触れる機会も乏しそうである。

しかしながら、沖縄の豚をめぐるさまざまな習俗を読み解いてみると、ムワリ島の牛との間にパラレルがあることが見て取れるのである。

豚は中国から沖縄にもたらされたものと言われるが、正確な渡来の時期は不明であ

る²⁷。しかし、その飼育が民衆に普及するのは近世に入ってからであり、特に17世紀にサツマイモが主食として普及したことによって可能となったと言える。食料が豊かでない中でも、芋の皮や茎などが飼料として活用出来るようになったためである²⁸。豚は中国からの使節をもてなすための料理の食材として用いられたため、琉球王府は養豚を積極的に促進し、このため18世紀になると庶民も広く豚肉を食するようになった²⁹。

宝暦12(1763)年に琉球からの漂着民からの話をもとに記された『大島雑記』には、「百姓年始節日又は祭日など、必ず豕を用ゆる」とし、「総高七十石程の費」になっていたと述べられている。このため琉球王府が豚の飼育を規制しようとしたところ、「百姓共は常々豕などたべる事は成らず、一年に五度か三度かたべるを、楽しんである」ため農民が猛反発し、規制は撤回されたという³⁰。豚が正月や祭の時に食べるハレの食物となり、生活上の重荷となっても人々がこれを食することを楽しみにしていたことがうかがえる。戦前に至るまで、年末に正月用の豚を屠殺(ウワーヤチュン)し、肉や脂肪を保存する作業を行うことが沖縄の年中行事の1つであった³¹。遠藤庄治によると、正月に家族に豚を食べさせることが出来ないと、先祖の霊が「正月にご馳走を食べられない子供は可哀そうだ」と言って子供を後生に連れて行ってしまおうと言われていたという。時として、娘を身売りさせても豚肉を入手することすらあったとされる³²。それほどまで豚は人々の意識と結びつき、生活のサイクルに必要な存在と見られていたのである。

食材であった豚は、同時に魔を祓う力を持つ動物ともされ、豚便所にも特別な力が宿っていると信じられていた。「戸外で妖怪に会ったら、豚小屋の豚の臀を三度蹴って鳴かせると魔除けになる」(金城朝永)という俗信はよく知られており、幽霊やあやかしに遭遇した後、慌てて豚小屋に飛び込んで豚を鳴かせたという話は非常に多い³³。「マジムンは豚のなき声が嫌い」(今帰仁)ということはよく知られていたのである³⁴。

この俗信の由来は定かではないが、しばしば引用されるのが、豚の神、フールの神は最も位の高い神であるという言い伝えであり、この霊力をもって妖怪の力を家から遠ざけることが出来ると信じられていたのである³⁵。そのため、節日には人々はフルにおいて香を焚いて祈願した³⁶。

実際、豚が人間の身代わりになるという考えもあった。クビー坂(大宜味村謝名城と田嘉里の間)で奇怪なものを見た人が帰宅後、豚小屋に行ってから家に戻ると、翌朝豚が死んでいたという³⁷。徳之島では、ケンムン(キジムナーのような妖怪)が灯す怪火に追われた人が家に逃げ込み、「飼っている豚を殺して身代わりに立て、家の四隅にその足を掲げたので命をとられずに助かった」という話がある³⁸。ここでは豚が明確に人間の身代わりとされている。「水死者の死体が上がらぬ時は豚の頭を海に投げ込まねばならぬ。豚と代って死体が浮き上る」という山原の俗信も、同じ発想から来ているのであろう³⁹。

廁がもともと境界的空間であることは民俗学ではよく知られているが、上で見たように、沖縄ではフルで飼育されている豚自身も境界的な動物であったと言うことが出来よ

う⁴⁰。家畜ではあるが、ハレの日の儀礼食に必要な存在であり、高神が宿ることで人間を守る霊力をも持つからである。いわば、食材が示す日常世界と神・妖怪が司る異界の両方に属しているのである。

このように考えると、豚妖怪の伝承の背景には、家畜ではあっても霊的な世界とのつながりを保つ豚への畏怖の念があると考えることが出来るのではないだろうか。与輪島では、誰かがいたずらで野外で豚の鳴き真似をすると、妖怪と思われて人々は逃げたという⁴¹。フールにいる豚は高神の制御下にいる頼もしい家畜であるが、集落外の境界地域にいる豚は得体の知れない存在だからであろう。「美女に化けた豚」の話も、家族への情愛から豚が人間と動物の一線を越えてしまうという物語的イメージの他に、人間には理解しがたい力を持つ豚が特定の人間に執着することへの不安を映しているのかも知れない。豚妖怪の俗信は、沖繩における豚と人間の特殊な関係あってこそ存在するフォークロアなのである。

4 なぜ「股越え」が危険なのか

もう1点考えたいのが、なぜ豚妖怪が人間の股をくぐろうとするのか、なぜ「股越え」をされると命を失うのかという疑問である。

沖繩地域には、豚以外にもあやかしが股を狙う話がある。赤子の霊については先に述べた通りであるが、アヒルの妖怪（アヒラーマジムン）が夜道に現われ、股をくぐって人を死に至らせるといふ言い伝えも存在する⁴²。佐喜真興英の『南島説話』（大正11[1922]年）には山羊に化けた妖怪の話が登場するが、小原猛によると、現在でも宮古島の平良周辺では人の股をくぐる山羊の話が噂されているようである⁴³。動物は異なってもこの特徴は共通する以上、「股越え」がこの伝承の核であることは確かであろう。

小松和彦によると、世間話として妖怪のことが語られる場合、内容は何らかの怪異体験（「コト」）を述べるものであり、妖怪（「モノ」）自体は姿を現さないことが多い。その現象を特定の妖怪的存在に帰すように解釈が為された時に、妖怪が初めて成立するのである。「『怪異現象』が世間話として話されるうちにある存在のイメージが生成され、共同体での共通理解を得て『妖怪』となる」と言える⁴⁴。そうになると、豚妖怪の伝承の源となる怪異体験とは、「夜道に何者かが接近して、股の間をくぐろうとすること」であると考えられる。

実際、股くぐり自体は強調されないが、闇夜に足元に触れて来る妖怪の話は日本各地で語られている。柳田國男が『妖怪談義』中の「妖怪名彙」の中で言及している備中のスネコスリ（「犬の形をして、雨の降る晩に、通行人の足の間をこすって通るといふ怪物」）などはよく知られているが、中には、夜道を転がって来て足元にとりつくものもある⁴⁵。徳之島のユナウワが時には人の足元を転がって惑わすとされていることが思い出されよう（事実、地面を転がるためこの物の怪は「ジンモラ[地を回るもの]」とも呼ばれていた⁴⁶）。豚妖怪を含め

てこうした妖怪像は、視界の効かない夜中に正体の分からない獣にまわりつかる恐怖から来たものではないだろうか。

それでは、「股越え」がなぜ致命的になるのであろうか。常光徹は、「股のぞき」をすることで幽霊船や見越し入道などのあやかしの正体を見破れるとする俗信に触れ、股の間から覗き見ることを異界を覗く行為と考える⁴⁷。つまり、股は異世界に通じる出入口、境界地域であると考えられるのである。安井真奈美は、この常光の主張と豚妖怪の股くぐりの伝承との関連性を指摘する⁴⁸。考えてみれば、人間自身が股の間から生まれたのであるから、人の命はこの出入口から来たものである。その神聖な空間を不吉な妖怪が出入りすれば、命を危険にさらすとの感覚は理解出来ることである。

股くぐりが持つ象徴性を想起させてくれるのが、病除けを願って仁王像などの股をくぐる慣習である。長野県松本市波田の阿弥陀堂や千葉県松戸市の萬満寺では、仁王尊金剛力士像の股をくぐれば病魔を避けられるとして、イベントとして股くぐりが開催されている⁴⁹。特に萬満寺の場合は江戸時代から続くという長い風習である。現在は行われていないが、東京都青梅にある塩船観音寺仁王門の仁王像も、戦前までは子供たちが疱瘡除けに像の下をくぐらされていたと伝えられている⁵⁰。同様の事例は他の地域にもあり、おそらく以前は広く見られた習俗なのではないだろうか。尊像の股に潜ることで厄を除き、力を与えられると考えられたとすれば、妖怪に股をくぐられれば逆の結果になるとの恐れは自然である。

それでは、股を閉じて棒や草鞋の紐で空間を作り、その間を妖怪が通り抜ければ安全であるとする言い伝えについては、何と解すればよいのだろうか。この点についても、常光徹による考察が参考になる。常光は、二股に分かれた棒の間から覗くと妖怪を識別できる、二股の木をもって結界とするなどの俗信を挙げ、人間の股に限らず、二股の形状をした物体も境界を作り出すと信じられていたことを指摘する。「二股の形にはそれ自体のうちに分岐と統合の境界性が表現されている」のであり、「この世と異界との境界」を象徴するものなのである⁵¹。そう考えると、棒などの物体を用いて人為的に二股を作り出し、妖怪をくぐらせることの意味が理解出来る。実際の股から魂を抜き取らせることなく、魔物に境界の向こう側に行かせることで難を逃れるのである。

5 結語

上で見たように、豚妖怪をめぐる伝承は、古からの沖縄の人々と豚との親密な関係の中で形成されて来たものである。コモロの妖怪牛の俗信と比較して見えて来たことは、ムワリ島の牛とは異なる意味において、沖縄の豚も2つの世界をつなぐ境界の動物であるということであった。豚は食用の家畜とはいえ、その肉は1年のサイクルを始める儀礼食として重要なハレの食物であった。豚便所の豚たちは、高位の神に司られた魔除けの力を併せ持つ存在でもあり、この境界性に対する畏怖の念が、豚が人間に変身する「美女に化ける

豚」話や集落の外に出没する豚妖怪の伝承の背景にあると考えることが出来る。闇夜に足にすり寄って来る野獣への恐怖が、この豚へのアンビバレントな気持ちと合わさった時に、「豚妖怪に股をくぐられるとマツイを取られる」というフォークロアが生まれたと考えられるのである。

現在も時おり遭遇譚が噂されるキジムナーとは異なり、豚妖怪については過去の伝承との印象が強く、リアリティは感じられなくなっている。最大の理由は、衛生面などの配慮からフルが用いられなくなったため豚が生活空間から姿を消し、豚に対する宗教的な恐怖の念も失われたためであろう。豚肉は今も沖縄では正月料理に使われるが、現在の豚は単なる食材である。加えて、街灯が至るところに設置されたため、夜道の足元に対する恐怖心も体験することが無くなって来ている⁵²。小松和彦が指摘するように、「コト（体験）」があつての「モノ（妖怪）」である以上、体験の環境が失われれば妖怪も姿を消すのである。仮に何らかの妖しい体験をすることがあつても、豚と結びつけることは難しいであろう。

このように考えると、怪異の中に動物の姿を認めていた頃は、人が動物を含めた自然界とつながりを持ち、人間にとっての利便性以外の価値を動物に見出していた時代であったと言うことが出来る。そうした感覚が失われたことは、人間性にとっても寂しい喪失と言えよう。『南島研究』誌に収録されている仲宗根幸市の「沖縄ヤンバルの妖怪」には、「昔はよくヤナムン（魔物）を見たが、今はほとんど見ない。純粋な心するとき（時代）に最も多く見た」と語った男性のことが触れられているが、深い言葉ではないだろうか⁵³。妖怪のイメージの中に、それを生み出す人間とその文化の心が現れるのである。

¹ 名護市史編さん室編『久志の民話』（名護市教育委員会、1991年）、249頁。

² 宜野座村教育委員会編『宜野座村の民話—伝説編』（宜野座村教育委員会、1987年）、393頁。

³ 新里幸昭「沖縄の妖怪」『沖縄文化研究』第21号、175-176頁；徳富重成「徳之島の怪異」『南島研究』第30号（1989年）、8頁；松井幸一・高橋誠一「聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識：奄美大島龍郷町を事例として」『関西大学東西学術研究所紀要』第44号（2011年）、252頁。

⁴ 田原千秋「豚妖怪の考察—耳切れ豚の出自」『日本文化の深層と沖縄』（山折哲雄編、国際文化研究センター、1996年）、61-87頁；「豚妖怪の伝承と伝播」『口承文芸研究』第29号（2006年）、157-160頁；「美女に化ける豚—その正体と発覚—」『昔話伝説研究の展開』（野村純一編、三弥井書店、1995年）、91-118頁；「『豚掣入』とその周辺」『沖縄文化研究』第5巻（1978年）、336-351頁。

⁵ 2つの例を見たい。「あの、村の青年たちが、毛遊びをしているところに、きれいな女の人が通って、いつも遊んでいたって。そしてもう、『お家はどこか』って聞いても全然教えないもんだから、ある人が、一回は、その女のぞうりを片一方盗んで持って行ったら、翌日、自分の豚を見たら爪がなくて。自分の家の豚が化けていたという話だよ。」（伊芸ウシ）宜野座教育委員会編『宜野座村の民話 昔話編』（宜野座村教育委員会、1985年）、304頁。「これは那覇であったことらしい。那覇の辻の遊郭で蛇味線を弾いて、毛遊び一していると、囃子をするとき

- に、『シーグウグウ・シーグウグウ』と言うものだから、何んだか、この人は変だなあと感じていたら、豚が人間に化けていたそうさ。やっぱり豚でも狐でも、長い年月生きると、人間に化けるとの話もあります。」(上原タケ) 渡名喜村教育委員会編『となきの民話』(渡名喜村教育委員会、1990年)、42頁。
- ⁶ 「豚妖怪の考察」、76頁。「豚妖怪の伝承と伝播」、158-159頁。
- ⁷ フールについては、以下を参照。平川宗隆『沖縄トイレ世替わりーフール(豚便所)から水洗まで』(ボーダーインク、2000年)；石井龍太・盛田拳生「琉球諸島の豚飼育施設ー豚便所、豚小屋にみる琉球諸島の近世、近代、現代史」『南島研究』第55号(2014年)、7-31頁。
- ⁸ 「豚妖怪の伝承と伝播」、158-159頁；「豚妖怪の考察」、77頁。
- ⁹ 田畑「豚妖怪の考察」、68頁。
- ¹⁰ 金城朝永「琉球妖怪変化種目ー附民間説話及俗信一」『怪異の民俗学2 妖怪』(小松和彦編、河出書房新社、2000年)、350頁。
- ¹¹ 崎原恒新『琉球の死後の世界』(むぎ社、2005年)、281頁；福地曠昭『沖縄の幽霊ー沖縄の幽霊百景+20話』(那覇出版社、2000年)、141頁。
- ¹² 福地、179頁。
- ¹³ 新里、143頁。
- ¹⁴ 「村はずれのガンヤー近くもマジムンドゥクルであった。先述したクビリのマジムンは、主としてウシマジムン(牛の妖怪)と、ジージウウーグー(小豚の妖怪)が出没。小豚の妖怪が人間の股の間を通り抜けると、その人は死ぬといわれ、たいへん怖がられたという。」仲宗根幸市「沖縄ヤンバルの妖怪」『南島研究』第30号(1989年)、39頁。
- ¹⁵ 田畑「豚妖怪の考察」、昇栄信・起田継央・積ちえ「奄美大島瀬戸内町の妖怪資料」『南島研究』第30号(1989年)、2-3、5頁。
- ¹⁶ 松井・高橋、259-260頁。
- ¹⁷ 徳富、8-9頁。
- ¹⁸ マッサロ・ヴェロニカ「与輪島における妖怪の民族誌的研究」『沖縄民俗研究』第31号(2013年)、173頁。
- ¹⁹ 「これの正体はデュージル(尻尾が白い)鼠で、尻尾が特別に大きい。モグラの大きいものと思えばいいでしょう。」(昇栄信) 昇・起田・積、3頁。
- ²⁰ 「豚妖怪の考察」、65-68頁。
- ²¹ 「アカングワー・マジムン 赤坊の死霊。四ツ匍いになって人間の股間を潜ろうとする。これに股間を潜られた人は、マツイを取られて死んでしまう。」金城、346頁。
- ²² 花瀨馨也「牛を喰い、牛と遊び、妖怪牛にとり憑かれるーコモロにおける牛と人間の『駆け引き』についてー」『人と動物、駆け引きの民族誌』(奥野克巳編、はる書房、2011年)、172-190頁。
- ²³ 同上、182頁。
- ²⁴ 同上、170頁、190-197頁。
- ²⁵ 同上、176-177頁。
- ²⁶ 同上、199頁。
- ²⁷ 比嘉理麻『沖縄の人とブター産業社会における人と動物の民族誌』(京都大学学術出版会、2015年)、25頁。石井・盛田、8頁。
- ²⁸ 宮城重二「沖縄の長寿と食文化:その光と陰」『女子栄養大学紀要』第49号(2018年)、18頁。
- ²⁹ 比嘉、25頁。

- ³⁰ 戸部良熙「大島筆記」『日本生活史料集成 第1巻 探検・気候・地誌（南島篇）』（宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮編、三一書房、1968年）、364-365頁。
- ³¹ 平敷令治『沖縄の祭司と信仰』（第一書房、1990年）、197-198頁。
- ³² 遠藤庄治「沖縄の妖怪と人間を脅かす異類」『遠藤庄治著作集1 沖縄の民話研究』（NPO法人沖縄伝承話資料センター、2010年）、379頁。
- ³³ 金城、352頁。福地の『沖縄の幽霊』には、それらの事例がいくつも収録されている。
- ³⁴ 仲宗根、37頁。
- ³⁵ 田畑、「豚妖怪の考察」、77-78頁。
- ³⁶ 平川、75頁。ただしこれらの話の場合、拝んでいる対象が「廁の神」であるのか「豚の神」であるのかはやや曖昧である。田畑は「この地では、『豚の神』という意識の方が濃厚である」と述べている。
- ³⁷ 崎原、123頁。
- ³⁸ 田畑英勝編『徳之島の昔話—鹿児島県大島郡』（1972年、丸井工文社）、355頁。奄美大島の瀬戸内町須子茂では、かつては庚申の日（カネサル）には災厄除けに集落で豚1匹を屠って食べ、平骨を村の入口に下げたという。これも豚が身代わりとなっていることを示す。小野重朗「生態史としての南島文化」『沖縄文化研究』第14号（1988年）、4頁。
- ³⁹ 田畑「豚妖怪の考察」、78-79頁。
- ⁴⁰ 廁の境界性については以下を参照。飯島吉晴「廁考—異界としての廁」『怪異の民俗学8 境界』（小松和彦編、河出書房新社、2001年）、102-133頁。
- ⁴¹ ヴェロニカ、173頁。
- ⁴² 金城、350頁；崎原、288頁。
- ⁴³ 小原猛「となりのマジムン ヒージャーは化けるよ 家畜もマジムンになるのか？」<https://kahu.jp/lifestyle/column/article-10239/>（閲覧：2021年2月13日）ただしこの山羊については、体を飛び越されると死ぬという話も伝えられている。
- ⁴⁴ 小松和彦編『妖怪学の基礎知識』（角川書店、2011年）、256頁。
- ⁴⁵ 柳田國男『妖怪談義』（28刷、講談社、1997年）、203頁。柳田は「スネコスリ」に続いて、やはり足元にまとわりつく讃岐の「アシマガリ」に言及している。その他の同種の物の怪については以下を参照。伊藤龍平『ツチノコの民俗学—妖怪から未確認動物へ』（青弓社、2008年）、61-63頁。
- ⁴⁶ 徳富、8頁。
- ⁴⁷ 常光徹「異界を覗く呪的なしぐさ」『昔話伝説研究の展開』（野村純一編、三弥井書店、1995年）、412頁；常光徹「股のぞきと狐の窓—妖怪の正体を見る方法」『妖怪変化』（常光徹編、筑摩書房、1999年）、26-60頁。
- ⁴⁸ 安井眞奈美『怪異と身体の民俗学—異界から出産と子育てを問い直す』（せりか書房、2014年）、223-224頁。
- ⁴⁹ 「上波田阿弥陀堂 仁王尊股くぐり祭り」<http://www.i-turn.jp/matakuguri.html>（閲覧：2021年2月13日）；「萬満寺『不動尊大祭（仁王様の股くぐり）』」<https://tabi-mag.jp/manmanjiniousama/>（閲覧：2021年2月13日）。この他に、山形県飽海郡の龍頭寺の仁王像にも股くぐりの習俗がある。
- ⁵⁰ 「塩船観音寺の仁王様の股くぐり（麻疹よけ・疱瘡よけ）」青梅市文化財ニュース254号（2008年）。
- ⁵¹ 常光「股のぞきと狐の窓」、54頁。

- ⁵² 「ワームについて、若い世代の話者はほとんど知らない。年配の話者にどうしてそうなのかと尋ねてみたら、返事は全て、広い道路が出来、電灯で明るくなり、もう暗い所があまりないことを挙げる。」 ヴェロニカ、174 頁。
- ⁵³ 「M氏はアラミー（霊、マジムンを見るタイプ）なので、昔はよくヤナムン（魔物の類）を見たという。しかし、今はほとんど見ることはない。純粹な心するとき（時代）に最も多く見たとのこと。」 仲宗根、39 頁。